予告 Future Event

[第34回] 名古屋芸術大学卒業制作展
[第11回] 大学院修了制作展

[第34回]

名古屋芸術大学卒業制作展

❶愛知県美術館ギャラリー [愛知芸術文化センター8階]

2月28日(水)〜3月4日(日) 10:00〜18:00(金曜日は20:00まで)
[美術学部] 絵画科(日本画・洋画)・美術文化学科
[デザイン学部] デザイン学科

❷名古屋市民ギャラリー矢田

2月27日(火)〜3月4日(日) 9:30〜19:00(日曜日は17:00まで)
[美術学部] 絵画科(洋画)・造形科・版画選択コース
[デザイン学部] デザイン学科

❸名古屋芸術大学アート&デザインセンター

2月27日(火)〜3月4日(日) 10:00〜18:00(日曜日は17:00まで)
[デザイン学部] デザイン学科

[第11回]

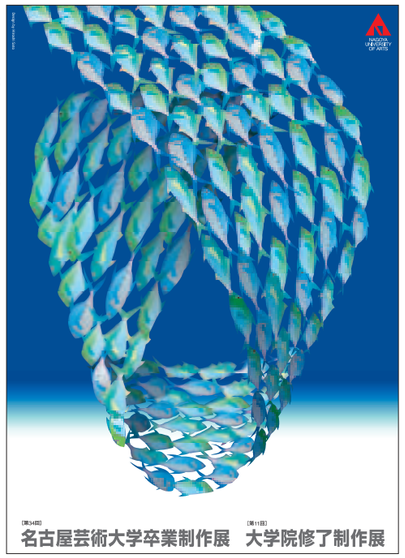
名古屋芸術大学大学院修了制作展

❹電気文化会館 東西ギャラリー

3月13日(火)〜3月18日(日) 10:00〜18:00(日曜日は17:00まで)
[美術研究科・デザイン研究科]

卒業制作展記念講演会

3月3日(土)14:00〜16:00
愛知芸術文化センター12階 アートスペースA
◎講演者:林 真理子氏 [作家]
「小説を書く時間」 ※申込は終了しています。



◎お問い合わせ
名古屋芸術大学 TEL 0568-24-0325
〒481-8535 FAX 0568-24-0326
北名古屋市徳重西沼65番地 http://www.nua.ac.jp/

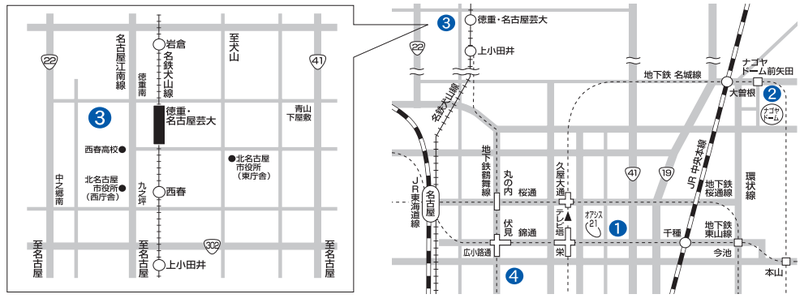
◎交通のアクセス

❶愛知県美術館ギャラリー
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2 TEL052-971-5511(代)
地下鉄東山線・名城線「栄」駅、名鉄瀬戸線「栄町」駅下車
オアシス21連絡通路利用 徒歩3分

❷名古屋市民ギャラリー矢田
〒461-0047 名古屋市東区大幸南1-1-10 TEL052-719-0430
地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅1番出口より徒歩7分

❸名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 北名古屋市徳重西沼65番地 TEL0568-24-0325
名古屋芸術大学西キャンパス
名鉄犬山線「徳重・名古屋芸大」駅より西へ徒歩15分

❹電気文化会館 東西ギャラリー
〒460-0008 名古屋市中区栄2-2-5 TEL052-204-1133
地下鉄東山線・鶴舞線「伏見」駅4番出口より徒歩2分



アート&デザインセンター 4 EXHIBITION → 5 SCHEDULE 展覧会スケジュール

Open 12:00—18:00
(最終日は17:00まで)
日曜・祝祭日休館
4/29[日]—5/6[日]は休館いたします。

[入場無料]どなたでもご覧いただけます。

4/ 4(水) → 4/11(水)	デザイン学科選抜レビュー展
4/13(金) → 4/18(水)	佐藤浩「SCRAPLAND」展
4/20(金) → 4/25(水)	写真部展
4/20(金) → 4/25(水)	歩 展
4/20(金) → 4/25(水)	0.3 展
4/27(金) → 5/ 9(水)	Masquerade
5/11(金) → 5/16(水)	小原朋世 展
5/11(金) → 5/16(水)	『あすみるゆめのみ』展
5/18(金) → 5/23(水)	peace nine(仮)
5/18(金) → 5/23(水)	分析写真展
5/25(金) → 5/30(水)	tane.
5/25(金) → 5/30(水)	本当の話

佐藤浩 「魚の骨」2006

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター 〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325 tel/fax.0568-24-2897

編集後記

この時期、学内では卒業・修了制作展に向けて、ざわざわぴりぴりとした空気が流れています。自身の創作活動に100%満足することなんてないでしょうが、後悔しないための努力をしたことは、これから社会に出たときの大きな支えになってくれることでしょう。

今年度からアート&デザインセンターも卒業制作展の会場となります。作品が多様化している中で、アート&デザインセンターも選択肢のひとつに加わったわけです。学生たちがここをどんな「ハレ」の場に変容させていくのか楽しみです。

B!e Vol.16
発行日 2007年2月23日
編集 江坂恵里子(アート&デザインセンター)
発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325 Fax. 0568-24-0326(代表)
Tel/Fax. 0568-24-2897(直通)
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン 岩田知人(サンメッセ株式会社)
印刷 サンメッセ株式会社
2007 Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるが下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2006 Vol.16
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 start on a journey

「旅立ちの春を前に」

2006年度を振り返って

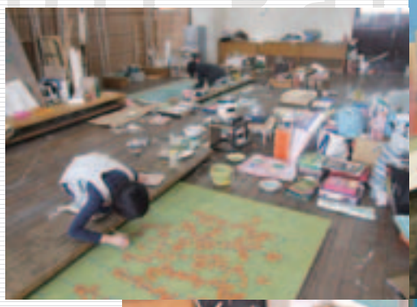
名古屋芸術大学は、音楽学部・美術学部・デザイン学部を擁する総合芸術大学としてその地位を確立すべく、「芸術に関する専門の学術技芸を教授研究し、総合的教養を授け、わが国の芸術文化の創造発展に寄与しうる専門家の人材の養成」に努めてきている。そして昨年新学部として人間発達学部が、設置認可を認められ、2007年度から発足することになっているが、このことは、総合芸術大学の「総合性」の内容をより豊かにすることになると考えられる。

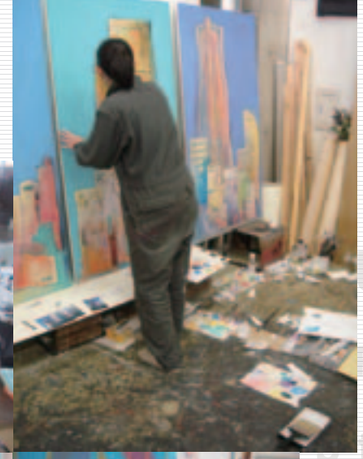
さて、こうした本学の動向のなか、西キャンパスのアート&デザインセンターは、この一年も芸術大学らしい活動の一端を担ってきた。同センターは、美術学部・デザイン学部両学部に関係する創作活動の発表の場として重要な位置を占めているが、私はいくつかの展覧会等の開会式で挨拶を引き受ける機会が多くあり、ますますその感を強くしている。ここでは本学の教員・学生はもとより、留学生等の創作活動の発表の場としてや、国内外の著名な芸術家の創作を企画展として紹介する機会など、ひろく学外の人々にも開かれている。つまりこの「場」は、本学が地域に根ざすとともに、世界に開かれた大学であることを象徴しているともいえよう。こうした活発な活動の背後には、様々な関係協力者とともに、それを支える教職員がいることも忘れてはならない。

同センターが西キャンパスの「顔」として、今後さらに芸術創造の発信を強めていくことが期待される。

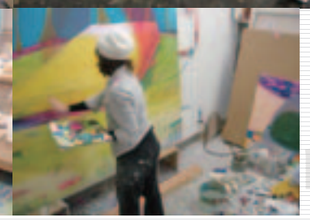
名古屋芸術大学学長 榊 達雄

写真上:AFTER REMISEN #8 五十嵐英之×百合草尚子 下:ジョージ・ハーディ展「Manual」展示風景





美術学部美術文化学科
非実技系の美術文化学科では「卒業論文」の提出が昨年末の12月19日、明けて2007年1月18日に行なわれた「口述試験」として質疑応答の様子



美術学部 絵画科
日本画、洋画のスタジオでは、最後の仕上げに余念がありません

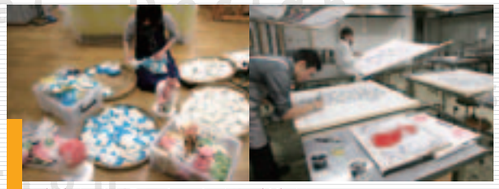
美術学部 版画選択コース
版画コースでは卒業制作展で毎年開催されるスタンプラリーのプレゼント用に版画を制作しています

特集 start on a journey
「旅立ちの春を前に」
卒業制作中

例年2月末から行われる卒業制作展・修了制作展に向けて、制作に追われる学生たち。今年も各工房やスタジオでは最後まで気を抜くことなく、連日奮闘している姿が見られます。

美術学部 造形科
木彫室・ブロンズ鋳造場での制作の様子

デザイン学部 IDコース
スタジオの様子



デザイン学部 テキスタイルデザインコース
軍手を染めたコスチューム、巨大な友禅染の制作風景

デザイン学部木工房

デザイン学部クレイ工房

デザイン学部 メタル工房

レビュー REVIEW レポート

「美系優秀【ビケイユウシュウ】2006」美術系学生選抜展

2006年11月23日－12月10日
文化フォーラム春日井・ギャラリー他

本展は2003年に開催された「美術系学生選抜展 美系優秀【ビケイユウシュウ】」の第二弾として開催された。今回は県内の三芸大－愛知県立芸術大学・名古屋芸術大学・名古屋造形芸術大学－の学生の中から各大学教員とかすがい市民文化財団によって選抜された22名の作品が展示された。

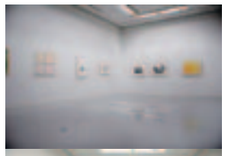
全体に作品の完成度が高く、個々の作品はよく理解できたが、私的な内容／日常性を表現した作品が多いと感じた。「生・生命（いのち）」を作品制作の背景に感じさせる作品も少なくなく、今回の出品者では最年少の河面理栄は、ベッドの上に植えられた生き生きとした芝と枯れた芝の対比で生と死のボーダレスな緊張を表現していた。一方、形式や制度への批判など、社会との関わりがあまり見えてこない作品が多い中で、末竹杏奈の「自殺者の数」をポップな色彩の首つりの輪で表現したインスタレーションは、コンセプトの重さを逆に際立たせている。また、北浦智恵の作品からは「庭」という方法論あるいはメディアを通じて新たな表現の可能性を予感させる。他の平面作品では、石田典子、辻井健太、真峰英子ら３名の力作が展観された。

この選抜展を継続することにより、「場」への取り組みや展示計画への相互コミュニケーションなど切磋琢磨するきっかけとなっていくことを期待する。

美術学部造形科教授　庄司 達

K－109展

2007年1月10日－14日
名古屋市民ギャラリー矢田



毎年12月又は1月頃に美術学部版画研究室主催による展覧会が開かれる。このタイトルのK－109とはK棟1階の109室（版画工房）からきている。
歴史は古く、すでに20年以上は続いている。出品メンバーは版画選択コースの学生（3年～大学院2年）と版画部の部員によるが、出品に際しては事前に　審査を行っている。（何でも出せばいいと言うものでは無い）そして、この展覧会には教員も参加することになっている。当然、我々教員は自分の作品によって学生から尊敬の眼差し！？を浴びるであろう為に、普段通り緊張しながら出品している。卒展、修了展を控えた4年生、院生には大変忙しい時期ではあるが、3年生にとってはまず最初の腕試しでもあるし、版画部員にとってもジャンルを越えた交流は刺激になるだろう。そもそも版画選択コース自体、本学で美術学部、デザイン学部双方から選択することができる異文化交流研究室である。この環境で学生達は日々、刺激を受け、研鑽し制作に打ち込んでいる。今から20年以上前に版画選択コースを立上げるため、当時の版画部の有志で開催したのがこのK－109展である。その先輩方の意志が現在でも継続している点でこの展覧会は大変意義深いものと言える。

美術学部非常勤講師　川田英二

エキゾチック ―メディアセレクトの感覚ツアー―

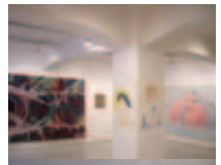
2007年1月18日－28日
愛知県児童総合センター（愛・地球博公園内）

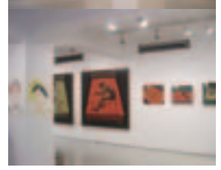
近年の（子供用）テーマパークがますます商業化、エンターテイメント化する中で、この施設では、親子がともに参加できる良質なアプリケーションを提供している。メディアアーティストが「感覚」をキーワードに展開した本展は、完成品よりプロセスを体験させているという意味において良好な企画となっている。今回出展されたプロジェクトの中には、並んだベッドの上に寝転び耳をあてると隣のベッドの人の鼓動が聞こえる石松丈佳＆加藤良将の作品「ネルシンゾ・ナルシンド」、大きな布の下に潜った後、顔を出すとたまたま居合わせた人と目が合ってしまう橋本公成の「めんとむかって」のような身体を媒介に他者の存在を認知する作品があり、日頃他者と関わる回路とは微妙に異なる部分のメタコミュニケーションを楽しむ作品が目立った。他方、参加者が何かを描いたり、作ったりする作品としては、地名の文字を重ね合わせたイメージから参加者が多様なイメージを見つけてクレヨンや色鉛筆で描くSLIPPED DISK＋椿原章代の「もじもじピクチャーズ」のような、レディメイドから多様なイメージを発見させる作品群が注目された。村上泰介の「trees」は、片方のブースで積み木を並べ替え、もう片方のブースでシャベルを使って土を掘ると、そこからヴァーチャルな木が生えてきて、やがて枝分かれしていく。積み木を並べ替える行為は枝分かれの仕方のプログラムとなっており、土を掘る行為は木が発芽するトリガーとなっている。子供たちはこれらの入力作業を何度も繰り返す中で、自分の一連の行為が何を作用させているのか少しずつ「理解」していく。これがコンピュータサイエンスを意味するのか、植物の摂理をなぞっているのか、そのいずれでもないのかは、参加者の気づき方によって多様であるが、どの子供たちも確実に何かを受け取っているように思えた。

デザイン学部デザイン学科助教授　津田佳紀

名古屋芸術大学選抜展
Nagoya University of Arts Selected Exhibition

2007年2月5日－10日
ギャラリー山口（東京）





名古屋芸術大学美術学部絵画科洋画コース主催のこの展覧会は、1998 年度よりシリーズ化され、毎年度、教員が本学洋画コース４年生全員を対象に作品創作に秀でた学生を数名選び、授業の一環として開いている。その目的の一つは作品創作に努力した学生への報賞・奨励、二つ目は主に東京を中心とした関東圏美術関係者等と出品者や作品との邂逅、そしてもう一つは 中部や関西と異なる東京のアート・シーンやマーケットを調査・研究することで、次代の美術作家としての意識を高めることにある。

ギャラリー山口が開廊したのは 1980 年。銀座、京橋にあるこの老舗のギャラリーは企画と貸しの現代美術画廊として、昔から全国に知られている。当時から学生が出品する大学展を催す考えなど無かったが、本学原田久教授の尽力によって可能になった。ギャラリーオーナーの出品作品を視る眼は厳しく、搬入時には毎回のように作品の質と内容が問われる。まさに作家育成の「道場」のような刺激的な場所・空間に曝され、研磨されてこそこの選抜展を開く意義がある。

10 回目となる今回も４名（坂上ちさと / 武政真奈 / 辻井健太 / 畠 知良）が力作を多数出品し、多様でカラフルな会場に来場者や美術関係者からも高い評価を得た。

美術学部絵画科教授　大崎正裕

RELAY ESSAY

「芸術による'英語'教育」

スタンフォード大学のエリオット・アイスナー教授の著書『The Arts and the Creation of Mind』から、私たちは英語教育において、一般教養、芸術教育さらに教育一般との関連性を見つけることができる。英語を教えるということは、文法の規則や語彙を教えるだけでなく、それ以上のものである。つまり、学生が興味のあるものに関連した話題に自分自身の意見を表明する必要を感じたとき、最高の学習をすることになる。本学の英語の授業においても、学生は"芸術のテキストとサブテキストの鋭敏な読者"いわば"芸術の民族学者"になることができ、芸術作品を見て「審美的パースペクティブ」と「作品制作の歴史的・文化的なコンテキスト」から芸術について語ることを学ぶことができる。また自分自身と作品に関して、どこが個人的で特殊であり、さらに独創的であるのかを学生自らが知り、それらを他者に表す能力を得ることができる。

…… スティーブ・マクガイア

<http://www.naea-reston.org/tenlessons.html>のサイトには、前述した著作の第４章の重要な項目「"Ten lessons the arts teach"芸術が教える10の授業（レッスン）」が抜粋されている。「芸術は何を教え、その教えがどのように表れるか」という主題の中で、私が特に紹介したいのは、芸術について自己を表現する必要があるときに、学生は語学能力と認識能力を向上させることができるということである。

*「The Arts and the Creation of Mind」Elliot W. Eisner著（Yale University Press 2002年）

デザイン学部教養部会 助教授